泉９号墳

一般国道４１５号（谷屋大野バイパス）道路改築事業に伴う

泉古墳群発掘調査報告

２０２０年１２月

氷見市教育委員会

泉９号墳

一般国道４１５号（谷屋大野バイパス）道路改築事業に伴う

泉古墳群発掘調査報告

２０２０年１２月

氷見市教育委員会

巻頭写真１　泉古墳群遠景　（南西から）

巻頭写真２　９号墳調査前　（南東から）

巻頭写真３　９号墳調査後　（南東から）

巻頭写真４　出土遺物

序

東に富山湾を隔てた霊峰立山を仰ぐ氷見市は、古くから海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。これら、郷土に残る文化財は先祖より受け継がれてきたものであり、私たちはあらためてその歴史的、文化的価値を再認識しながら、末永く子孫に引き継いでゆかねばなりません。

本書で報告するのは、一般国道415号の道路改築事業に伴い、令和元年度に実施した泉9号墳本発掘調査の成果をまとめたものです。

一般国道415号は、石川県羽咋市を起点とし、富山県氷見市、高岡市、射水市を経由して富山市に至る幹線道路です。現在、能越自動車道氷見ICの西側に位置し、幅員が狭小となる谷屋、大野両地区間を結ぶバイパスとして、谷屋大野バイパスの建設が進められています。

調査の対象となった泉古墳群は、上庄川流域の泉地内に所在し、古墳時代前期から後期まで続く流域最大規模の古墳群です。今回、古墳群を谷屋大野バイパスが横切ることとなり、路線上に位置する9号墳の開削が避けられないことから、本発掘調査を実施することになりました。

泉9号墳は、鶏塚と呼ばれ、古くに地元青年団による発掘が行われた場所です。今回の調査では限られた成果ではありましたが、泉9号墳の概要を明らかとすることができました。

これら調査の成果が今後の文化財保護の一助となるとともに、地域の歴史への関心、理解につながることを願っております。

終わりに、本発掘調査の実施にあたりましては、関係者の皆様をはじめ、多くの方々に多大なるご協力をいただきました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

令和　2年　12月

氷見市教育委員会
教育長　鎌　仲　徹　也

例　言

1　本書は、令和元年度に富山県氷見市泉（ひみしいずみ）地内に所在する泉古墳群（9 号墳）の発掘調査報告書である。

2　調査は、一般国道 415 号道路改築事業に先立ち、富山県の委託を受けて、氷見市教育委員会が実施した。

3　発掘調査は、氷見市教育委員会が主体となり、株式会社太陽測地社富山支店が担当した。

4　調査は、富山県からの委託金で実施した。

5　調査面積・期間は次のとおりである。

調査面積　：635 ㎡

現地調査　：令和元年 9 月 17 日から令和 2 年 1 月 7 日（実働 75 日）

整理作業　：令和 2 年 5 月 8 日から令和 2 年 12 月 20 日（実働 73 日）

6　調査事務局は、氷見市教育委員会（氷見市立博物館）に置いた。事務担当は下記のとおりである。

館長：大野　究、主任学芸員（令和元年度）・主査（令和 2 年度）：廣瀬　直樹

7　発掘調査担当者は次のとおりである。

監　督　員	氷見市教育委員会　氷見市立博物館	廣瀬　直樹
監理責任者	株式会社太陽測地社富山支店	般若　　真
調　査　員	同　　上	蝦名　　純
調査補助員	同　　上	松本真由美

8　本書は、第 1・2 章を廣瀬直樹（氷見市教育委員会）、第 3・4 章を蝦名純が執筆し、編集は蝦名が行った。

9　出土遺物と調査にかかわる資料は氷見市立博物館が保管している。

10　遺跡の略号は「IZ-9」とした。

11　調査参加者は次のとおりである（五十音順）。

発掘作業員：上野恵美子、垣地義勝、川島好秋、小島俊文、酒井久雄、多胡信夫、東田誠、
中橋与一、船山実、宮田三雄、向修誠、屋敷幸子、山口巌、山崎孝義、山端久芳
（以上、氷見市シルバー人材センター）

整理作業員

遺物実測：新谷由子、小林直子、松田智恵子　土壌洗浄：北山智弓、戸出句彦
（以上　株式会社太陽測地社遺物整理室）

12　調査および本書作成にあたり、下記の方々・機関から多大なご教示、ご協力を得た。記して感謝申し上げる（五十音順）。

泉地区・越田宗彦（泉地区自治振興委員）・富山県教育委員会・富山県高岡土木センター氷見土木事務所・富山県道路課・富山県埋蔵文化財センター・西井龍儀（氷見市文化財審議会委員）・村江元三・村江清美

目　次

第１章：調査の概要 …… 1
　第１節：調査に至る経緯 …… 1
　第２節：試掘調査の経過 …… 3
　第３節：本調査の経過 …… 3
第２章：遺跡の位置と環境 …… 4
　第１節：地理的環境 …… 4
　第２節：歴史的環境 …… 4
第３章：調査の成果 …… 7
　第１節：本調査の概要 …… 7
　　(1) 調査の方法 …… 7
　　(2) 調査の日程 …… 7
　第２節：基本層序 …… 8
　第３節：遺構 …… 8
　第４節：遺物 …… 10
第４章：まとめ …… 11
引用・参考文献 …… 13
報告書抄録

表目次

第１表　周辺の遺跡 …… 5
第２表　遺物観察表 …… 12

巻頭写真図版目次

巻頭写真１　泉古墳群遠景（南西から）
巻頭写真２　９号墳調査前（南東から）
巻頭写真３　９号墳調査後（南東から）
巻頭写真４　出土遺物

図目次

第１図　谷屋大野バイパス全線平面図 …… 2
第２図　周辺の遺跡 …… 6
第３図　グリッド配置図 …… 7
第４図　基本層序模式図 …… 8
第５図　９号墳全体図（現況） …… 14
第６図　９号墳全体図（完掘） …… 15
第７図　遺構実測図１　壁土層断面（1） …… 16
第８図　遺構実測図２　壁土層断面（2） …… 17
第９図　遺構実測図３　９号墳完掘 …… 18
第 10 図　遺構実測図４　９号墳土層断面図 … 19
第 11 図　遺構実測図５　SK01・SD01・SD02・SD03 … 20
第 12 図　遺物実測図 …… 21

写真図版目次

図版１　遺跡周辺空中写真
図版２　1.　９号墳近景
図版２　2.　９号墳東西土層断面東側
図版２　3.　９号墳東西土層断面西側
図版２　4.　９号墳南北土層断面南側
図版２　5.　９号墳南北土層断面北側
図版３　1.　SK01 土層断面
図版３　2.　SK01 全景
図版３　3.　SD01 土層断面
図版３　4.　SD02 土層断面
図版３　5.　SD03 土層断面
図版３　6.　SX02（8 号墳）検出
図版３　7.　SX02（8 号墳）土層断面
図版３　8.　墳丘部作業風景
図版４　　遺物写真

第1章　調査の概要

第1節　調査に至る経緯

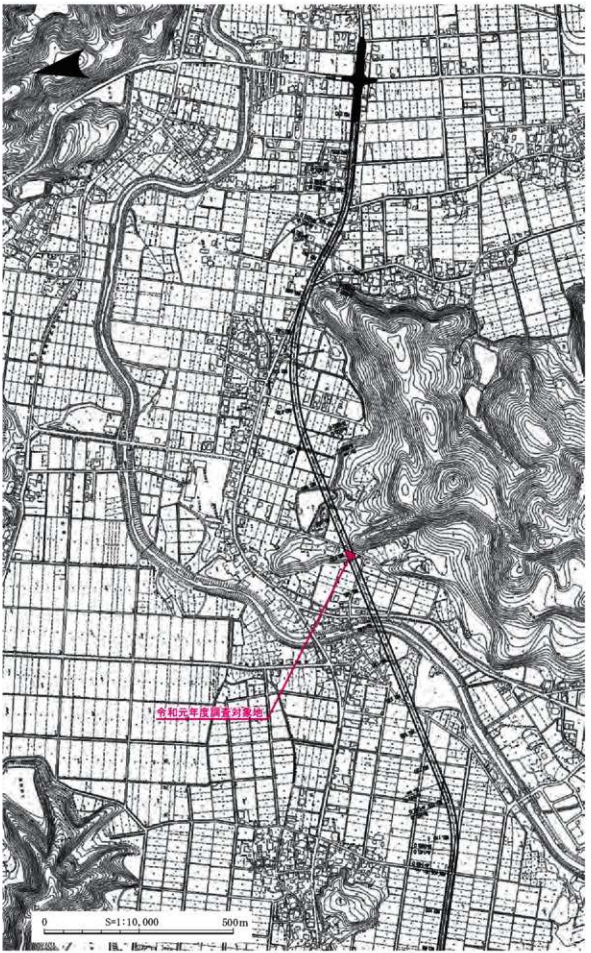
平成19年に開通した能越自動車道氷見IC東側のアクセス道路、一般国道415号（鞍川バイパス）の整備に先立つ埋蔵文化財の保護対策協議は、平成11年度より行われていた。それと並行して、氷見IC以西、谷屋、大野両地区間のバイパス（谷屋大野バイパス）整備に先立つ埋蔵文化財についても、氷見市教育委員会と氷見土木事務所の間で議題にあがることとなった。この時点で複数あった計画ルートの中には泉古墳群を横切るものがあり、特に古墳群中の前方後方墳（22号墳）には影響を与えないルートを取るよう申し入れた。

具体的な埋蔵文化財保護対策に関しては、谷屋～大野間のルートが地元、氷見市、氷見土木事務所を交えた協議会で確定した後に協議されることになった。初回の協議は、氷見市教育委員会と氷見土木事務所の担当者の間で、平成17年12月2日に行った。協議では、確定ルート周辺を対象にあらためて分布調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地について把握し、試掘調査の有無を判断することなど、氷見市教育委員会の意見を伝えた。この協議を受け、氷見市教育委員会は平成18年3月27日に予定地内を対象とする分布調査を実施した。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地である領毛A遺跡の周辺で遺物を採集したほか、3か所で新たに遺物の散布が確認された。3か所の散布地は、谷屋地内の谷屋上ノ江遺跡、谷屋・中村間にまたがる天場山南遺跡、中村地内の中村大橋遺跡として周知し、試掘調査の対象とすることになった。

平成19年6月から8月には、谷屋大野バイパス計画ルートと泉古墳群の位置関係を把握するため、氷見土木事務所による泉古墳群の測量調査が実施された。測量調査は、泉古墳群中の前方後方墳（22号墳）を保護し、発掘調査が必要な古墳の位置情報を確認するためのもので、氷見市教育委員会との協議により、測量調査の対象は約20,000㎡、6号墳・7号墳（猫塚）・8号墳・9号墳（鶏塚）・21号墳・22号墳の6基の古墳を含む範囲とした。測量調査の終了後、氷見市教育委員会は氷見土木事務所に対し、測量調査の成果に基づいたルートの調整を要請した。その結果、6・7号墳が削平されるルートと8・9号墳が削平されるルート等が検討されることになり、結果として8・9号墳が削平されるルートで事業計画が進められることになった。

平成20年から22年度まで、順次、用地取得等が進められ、平成23年度には、先行して用地買収が完了した谷屋上ノ江遺跡の試掘調査を実施した。調査の結果、古墳時代から古代の遺構・遺物が少量確認されたものの、本調査は不要と判断した。それにより谷屋上ノ江遺跡を含む主要地方道高岡氷見線以西の区間について工事が進められ、平成26年11月1日には谷屋区間1.1ｋｍが開通し、供用開始されるに到った。

その後も用地取得の進捗に合わせ、平成25年緒には天場山南遺跡、平成26年度には中



第１図　谷屋大野バイパス全線平面図

村大橋遺跡、平成 30 年度には領毛 A 遺跡の試掘調査を実施した。そのうち中村大橋遺跡については、平成 27 年度に富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所による本発掘調査が実施された。

令和元年 6 月には、一連の埋蔵文化財試掘調査の最終となる泉古墳群 8・9 号墳の試掘調査を実施した。調査では墳丘裾部の確認等を行い、その結果を受けて令和元年度中に泉古墳群 8・9 号墳の本発掘調査を実施することになった。

第 2 節　試掘調査の経過

泉古墳群は、丘陵最高所に位置する直径 45m の 1 号墳（高塚）をはじめ、25 基の古墳から構成される。古墳時代前期から後期まで続く古墳群である。

調査対象となるのは、8 号墳および 9 号墳（鶏塚）の 2 基である。8 号墳は、丘陵を横断する道路開削面に周溝が表れているとされる。9 号墳（鶏塚）は、直径 11～12m の円墳と考えられ、大正期に開墾によって遺物が発見された。大正 11 年には地元の青年団による発掘が行われたが、その際には遺物は出土しなかったという。墳頂部は、かつて発掘時の凹みがあったが、現在は埋め戻されている。9 号墳（鶏塚）の出土遺物としては、水晶製切子玉（第 14 図 1）、ガラス小玉、碧玉製管玉、土器があり、切子玉の出土から 6 世紀代の後期古墳と考えられる（氷見市 2002）。

調査対象地は、古墳群北側で、西に上庄川を見下ろす丘陵端部に位置する。現況は山林である。標高は、9 号墳の墳頂部で約 19.5m を測る。調査対象地南側の尾根筋には、方墳の 21 号墳と前方後方墳の 22 号墳が並ぶ。本来はこの尾根筋の末端に今回の調査対象地が位置するが、現況では道路の開削によって分断されている。また、調査対象地の北東側の細長い丘陵には 12～15 号墳が並び、北には自然地形の可能性がある 10 号墳と 11 号墳が所在する。

令和元年度の試掘調査実施に先立ち、前年の平成 30 年度には、泉 8・9 号墳周辺の測量調査を実施した。続く令和元年 6 月、前年度に作成した平面図を基に試掘トレンチを設定し、試掘調査を実施した。

調査の結果、大正 11 年に地元青年団が実施した発掘の際の掘削坑と推測される土坑が検出された。また、9 号墳の東側に設定したトレンチで、斜面中程および斜面下部で 2 条の溝状遺構を確認した。8 号墳については、周溝および墳丘の存在を確認することはできなかった。その調査結果を受け、工事によって掘削が避けられない 8・9 号墳を含む約 700 ㎡の範囲を対象として実施することとなった（氷見市 2020）。

第 3 節　本発掘調査の経過

本発掘調査については、試掘調査の結果を受けて同一年度中に実施する方向で、富山県高岡土木センター氷見土木事務所と氷見市教育委員会の間で協議が交わされていた。令和元年 6 月に実施した試掘調査の結果を受けて、すぐさま本発掘調査の準備に取り掛かった。

令和元年 7 月 4 日付けで、富山県から氷見市へ本発掘調査が依頼された。それを受けて氷見市教育委員会では準備を進めた。本発掘調査は、氷見市教育委員会が主体となり、株式会社太陽測地社富山支店に業務委託して実施することになった。

第 2 章　遺跡の位置と環境

第 1 節　地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にあたる。昭和 27 年の市制施行から昭和 29 年までに旧太田村（現、高岡市太田）を除く氷見郡 1 町 17 村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約 230k ㎡、人口は約 4 万 7 千人である。

市域は、北・西・南の三方が標高 300～500mの丘陵に取り囲まれ、これら丘陵から派生する小丘陵により、西条・十三谷・上庄谷・八代谷・余川谷・灘浦の 6 つの区域に分けられる。また市の東側は、約 20km の海岸線をもって富山湾に面している。市の北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流からなる谷地形であり、上庄川流域以外はまとまった平野が少ない。一方、市の南半部は、主として布勢水海（十二町潟）が堆積してできた平野と、その砂嘴として発達した砂丘からなる（氷見市 1999・2000）。

調査対象の泉地区は、上庄川中流の南岸に位置する。上庄川は、長さ、流域面積とも市内では最大の河川で、流域一帯を上庄谷と呼ぶ。また、上庄川下流左岸の加納地区の平野には弥生時代から古代にかけて、加納潟（仮称）という潟湖が所在したとされる。

泉地区は、北および東方に平野が広がり、西南方には丘陵地が連なる。平野部には、東西に一般国道 415 号が横断する。

第 2 節　歴史的環境

以下、上庄川流域の遺跡について中流域を中心に概観する（氷見市 2002）。

上庄川流域の縄文時代の遺跡は、上流丘陵部と下流域に散在しており、中流域では未確認である。また弥生時代の遺跡についても、中流域では未確認である。安定した平野が開け、弥生時代中期から終末期の遺跡が複数営まれた下流域や、氷見市の弥生時代終末期の集落跡、小久米 A 遺跡が立地する上流域とは対照的である。

古墳時代に入ると多くの古墳群が築かれるようになる。この地域は氷見市内でも最も古墳が集中する地域であり、県下最大級規模の円墳を擁する泉古墳群、発掘調査で短甲が出土した古墳時代中期のイヨダノヤマ古墳群、平野部の独立丘陵に単独で築かれた前方後円墳の中村天場山古墳など、古墳時代前期から後期にかけての古墳が多数確認されている。谷屋地内には、谷屋新堂出古墳や谷屋浦出古墳群があり、谷屋浦出古墳群に隣接する谷屋 B 遺跡では、古墳時代後期の須恵器や滑石製の子持勾玉が採集されている。谷屋地区とは論田川を挟んで南側に位置する丘陵上には新保城山古墳群、そのさらに南側には新保古墳群が所

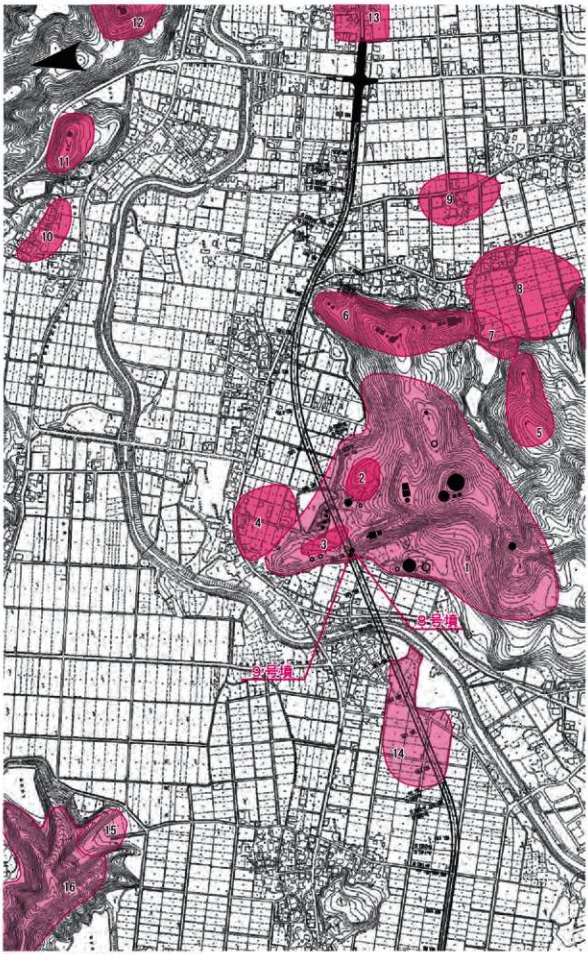
在し、いずれも古墳時代初頭の築造と推定されている。また上庄川流域では、古墳時代後期以降、横穴墓群も複数造営されており、上庄川中流域には新保横穴群・中村横穴群が所在する。

古代から中世にかけても遺跡が広く分布し、古墳時代に引き続いて積極的な開発が行われていた地域と推定される。谷屋地区の南西、小窪地区には古代寺院の小窪廃寺跡が所在する。これまでに平瓦や須恵器が採集され、8世紀初め頃の寺院と推測されている。小窪廃寺跡の南方丘陵裾にその瓦の一部を供給した小窪瓦窯跡が立地しているほか、廃寺周辺には新保南遺跡や新保野際遺跡といった古代から中世にかけて断続的に営まれた遺跡が所在する。谷屋地区に所在する谷屋A遺跡は、「上坊寺」と呼ばれる寺院伝承地である。近くの飛滝神社に祀られている聖観音菩薩像と地蔵菩薩像は、上坊寺跡に建立された白山社に祀られていたものが、昭和2年に合祀した際に遷座されたものである、という。どちらも朽損が著しいが、平安時代後期の作とされている（氷見市 1963・氷見市教育委員会 2002）。また泉古墳群と上庄川を挟んだ対岸には、中村大橋遺跡が所在する。8世紀中頃から9世紀前半頃の倉庫とみられる建物群が検出されており、上庄川の舟運と臼が峰越えの陸路の結節点の倉庫群として注目される。

中世の遺跡としては、山城跡や宗教関連遺跡が複数確認されている。谷屋地区と論田川を挟んだ南側には、先に触れた新保城山古墳群を改変して築かれた新保城跡があり、谷屋地区西端の丘陵上には飛滝城跡が立地する。中村地区北側の丘陵には、戦国時代末期に上杉氏の支城のひとつとして築かれた中村城跡が立地する。また谷屋地区の西側、論田地区の山間部には論田経塚があり、かつて瓦経が出土したと伝えられる。また、谷屋地区北西の熊無地区には中世墓である熊無遺跡があり、石仏・石塔類や集石が確認されている。

第1表　周辺の遺跡

No.	遺跡名	遺跡番号	種別	時代	No.	遺跡名	遺跡番号	種別	時代
1	泉古墳群	042	古墳	古墳前～後期	9	大野沢遺跡	211	散布地	縄文・古代
2	領毛A遺跡	040	散布地	縄文～古墳	10	七分一B遺跡	259	散布地	古代・中世
3	領毛B遺跡	041	散布地	古墳	11	七分一古墳・古墓	328	古墓・中世墓	古墳・中世
4	泉横山遺跡	257	散布地	古代・中世	12	加納南古墳群・加納城跡	327	古墳・城跡	古墳・中世
5	泉谷内口古墳群	341	古墳	古墳後期	13	KB-3遺跡	310	散布地	古代
6	泉往易古墳群	329	古墳・城館	古墳・中世	14	中村大橋遺跡	387	散布地	古代・中世
7	泉A遺跡	188	散布地	縄文・古代	15	中村横穴群	177	横穴	飛鳥白鳳
8	泉C遺跡	256	散布地	古代	16	中村城跡	033	城館	戦国



第２図　周辺の遺跡（S=1:10,000）

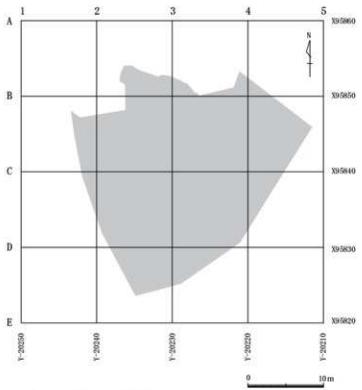
第３章　調査の成果

第１節　本調査の概要

（1）調査の方法

試掘調査の成果を受け、古墳主体の調査を想定し、表土掘削は人力で行った。墳丘部表土除去後、平面直角座標第Ⅶ系を用い、10m間隔に基準杭を設定し調査を実施した。

基準杭には、北から南へA・B・C…（アルファベット）、西から東へ１・２・３…（算用数字）を付し、その北西交点をグリッドの呼称とした。表土掘削後、包含層掘削、遺構検出を実施した。遺構は半截もしくはセクションベルトを残して掘削し、土層を記録した後完掘した。９号墳主体部では、微細遺物採集のため堆積土の土壌サンプルを採集した。遺構の計測は、土層断面図は簡易遣り方、平面計測はドローンによる空中写真測量を実施した。



第３図　グリッド配置図

（2）調査の日程

基準点観測・現場事務所設営後、令和１年９月17日から現地調査を開始した。調査区内の除草作業から始め、次いで試掘坑の清掃作業を行い、ドローン撮影による発掘前全景写真撮影を実施した。その後、墳丘頂部から表土掘削を開始し、順次墳丘裾野へ移行していった。表土除去後、グリッド杭打設、遺物包含層掘削を行った。遺構検出を実施し、古墳墳丘部と土坑１基、溝３条を検出した。土坑は墳丘頂部で検出され、古墳主体部と判断した。遺構検出写真撮影後、土坑の精査を行った。微細遺物採集のため土壌サンプルを採集し、土層図を作成し完掘した。その後、溝・墳丘堆積土掘削を実施した。土層図を作成し、完掘した。

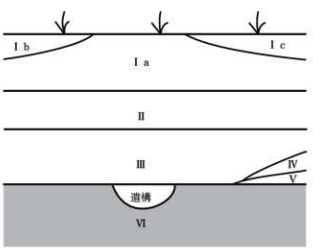
古墳及び調査区北東側で検出した溝が、調査区外北へ伸びることが想定され、古墳の形状を明確にする目的から、調査範囲北側を拡張することとなった。12 月５日から拡張部の調査を開始し、表土除去、包含層掘削、遺構検出を実施し、墳丘北側と溝１条を検出した。遺構検出写真撮影を行い、遺構掘削、土層図を作成し、完掘した。

12 月 23 日にドローン撮影による完掘全景写真撮影、空中写真測量を実施した。12 月 24 日に拡張部の埋め戻し、令和２年１月７日に資材撤収及び仮設ハウス等の撤去が終了し、現地調査を終了した。

第２節　基本層序

調査区は、古墳を主体に設定した。墳丘西側は大きく崩落し、急傾斜地となる。墳丘南側は一端平坦面となり、南端部は激しく崩れる。東から北側は緩やかに傾斜し、沢地形となる。

基本層序は、調査区北東壁断面を基準とし、６層に細分した。Ⅰ層は表土で、３層に細分し、Ⅰａ層：表土（黒褐色腐植土）・Ⅰｂ層：表土（黒褐色土）・Ⅰｃ層：表土（暗褐色土）である。第Ⅱ層：遺物包含層（にぶい黄褐色土）、第Ⅲ層：遺物包含層（黒褐色土）、第Ⅳ層：間層（褐灰色粘質土）、第Ⅴ層：漸移層（褐色粘質土）、第Ⅵ層：地山（にぶい黄橙色砂質土及び泥岩層ないし褐色粘土）である。第Ⅳ・Ⅴ層は調査区北東部沢地形のみの検出である。また、墳丘及び西側は泥岩層及び砂質土が地山となり、激しい崩落がみられ、北東側沢地形では褐色粘土が地山となっている。



表土	Ⅰａ	10YR2/2　黒褐色腐植土
表土	Ⅰｂ	10YR2/3　黒褐色土　泥岩塊多量
表土	Ⅰｃ	10YR3/3　暗褐色土　泥岩塊少量
遺物包含層	Ⅱ	10YR4/3　にぶい黄褐色土
遺物包含層	Ⅲ	10YR2/2　黒褐色土
間層	Ⅳ	10YR4/1　褐灰色粘質土
漸移層	Ⅴ	10YR4/4　褐色粘質土
地山	Ⅵ	10YR7/4　にぶい黄橙色砂質土及び泥岩層ないし　10YR4/6　褐色粘土

第４図　基本層序模式図

第３節　遺構

泉古墳群は、上庄川中流域、上庄川右岸の北へ張り出した丘陵上に立地する。９号墳は、北へ突出した丘陵末端部西縁に位置する。泉古墳群は、前方後円墳１基・円墳 19 基・方墳５基が確認・発掘調査されている。１号墳「高塚」は、径 43ｍの大型円墳、17 号墳「鶴塚」は、大正年間に発掘調査が行われ、人骨・勾玉・小玉・直刀・鉄鏃等が出土している。今回の調査対象である９号墳「鶏塚」でも大正年間に主体部の発掘調査が行われ、水晶切子玉・ガラス小玉・管玉等が出土し、出土遺物から古墳時代後期の構築と推定されている。また、令和元年６月に試掘調査が実施され、土坑１基・溝２条が確認されている。

今回の調査は、９号墳を主体とし、検出した遺構は古墳１基、土坑１基、溝３条である。

９号墳

墳丘（第５・６・９・10 図、図版２）

９号墳は削平を受けておらず、マウンド状に遺存していた。墳丘西側は広く崩落し急傾斜地となっている。墳丘基盤層は、泥岩層ないし砂質土で、墳丘部全体に崩落部分がみられる。

発掘調査は、試掘坑確認作業から開始し、墳丘頂部から表土掘削・遺構検出を行い、９号墳１基、墳頂部で土坑１基（SK01）、墳丘部中位で溝１条（SD01）、墳丘裾野で溝２条（SD02・SD03）を検出した。

検出した SD02 は、墳丘と平坦面の変化点にあり、９号墳に帰属する周溝と判断した。９号墳の平面形は、不整円形を呈し、周溝内径から長径約 15.2m、長軸方向 N-50° -W を測る。墳丘・周溝の形状から円墳と判断した。墳頂部に径約６mの平坦面をもつ。墳頂部の標高は 19.2m、周溝底面と墳頂部の比高差は 2.2m を測る。堆積土は、表土直下約 0.3mで地山となり、墳丘流出土・地山崩落土主体の堆積である。墳頂部周辺の第４層が粘質土で盛土と思われ、盛土は墳頂部周辺のごく一部の残存である。墳丘は地山削りだしにより作出されている。遺物は、墳丘表土から須恵器片が少量出土した。

土坑（第 11 図、図版３）

SK01（主体部）

試掘調査で確認された土坑である。墳頂部平坦面中央部に位置し、表土直下で検出した。平面形は北西から南東方向に長軸をもつ不整方形を呈する。規模は、長軸方向は N-48° -W、長軸 2.32m、短軸 2.00m、深さ 0.34mを測る。底面は隅丸長方形を呈し、長軸 1.64m、短軸 1.04mを測る。壁は南・東壁がやや急角度、西・北壁が若干段をもって立ち上がる。西側が根撹乱で壊されている他重複は無い。堆積土を４層に細分し、レンズ状の堆積で自然堆積土である。石槨・粘土槨等の痕跡はみられず、土坑底面・壁面の形状から木棺の直葬と推定される。

今回の調査では、出土遺物は確認できず、微細遺物採集のため土壌サンプルを採集した。現地調査終了後水洗・フルイ分け作業を実施し、玉類等の副葬品の残存は確認でできなかった。

溝（第 11 図、図版３）

SD01

試掘調査で確認された溝である。標高 18.5m前後の墳丘中位、南～東側 1/4 程に巡る。平面形は弧状を呈し、SD02（周溝）と同心円状となる。規模は検出長 14.0m、幅 0.3～0.6m、深さ 0.2mを測る。山側の壁は急角度で立ち上がり、L字状の断面形である。底面はほぼ平坦で、幅 0.12～0.26mを測る。堆積土は泥岩少塊を含む黒褐色土・褐色土が堆積し自然堆積土である。９号墳周溝（SD02）と同心円状の平面形となることから９号墳に関連する遺構とも考えられるが、遺物の出土が無く、掘削時期・用途等は不明である。

SD02（周溝）

標高 17.5m前後の墳丘裾野、南東～北東側を 1/4 程巡り、傾斜と平坦面の変化点に位置する。平面形は弧状を呈し、規模は検出長 12.9m、幅 0.74～1.2m、深さ 0.2mを測る。両壁は緩やかに立ち上がり、底面は若干の凹凸がみられる。堆積土は泥岩小塊を含むにぶい黄褐色土・褐色土が堆積し自然堆積土である。遺物の出土は無い。地山である泥岩層を掘り込み、墳丘と平坦面を明確に区画している。９号墳に帰属する周溝と判断した。

SD03

標高 17.0m前後の墳丘裾野、北東～北側を巡る。全体形は緩やかな弧状を呈し、北・東端部は直線状である。規模は検出長 19.8m、幅 0.36～0.74m、深さ 0.24～0.4mを測る。両壁はやや急角度で立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は泥岩少塊を含む暗褐色土が堆積し、自然堆積である。遺物は堆積土上層から須恵器片が１点出土した。

本溝は、墳丘裾野を巡り周溝と重複しないことから、周溝とも考えられるが、断面・平面形状が SD02（周溝）と大きく異なることから、古墳に帰属する周溝の可能性は低いと判断した。出土遺物が少なく、掘削時期・用途等は不明である。

古墳構築時期

今回の調査では、主体部等からの遺物の出土は無かった。古墳の構築時期は、大正年間の調査で出土した遺物・古墳の形状から、古墳時代後期と考えられる。

８号墳（第６、図版３）

８号墳は、丘陵を横断する道路の掘削面で周溝断面が確認され、９号墳と近接する古墳の存在が推定されていた。今回の調査では、調査区北東部道路際で黒色土の落ち込みを検出した。精査の結果、ビニール等のごみが出土したことから現代の撹乱と判断した。そのため、８号墳については欠番とする。

第４節　遺物

今回の調査では、土師器・須恵器・珠洲焼・陶磁器がコンテナ換算で 1/4 箱出土した。SD03 出土の須恵器以外は、表土からの出土である。

須恵器（第 12 図、図版４）

１は SD03 上層出土の須恵器甕胴部片である。内面に同心円状の当て具痕、外面に平行上のタタキ痕がみられる。小片のため帰属時期は不明である。

２～16・18 は表土出土須恵器で、８・18 は試掘坑出土である。２は有台付坏底部片で内・外面にロクロナデがみられる。３は内・外面にロクロナデ、底面にクシ状工具による斜交線がみられる。瓶類の底部と思われる。４～６は瓶類体部片と思われる。４は肩部片で、内外

面にロクロナデ、内面に同心円状の当て具痕、外面にカキ目がみられる。5は内・外面にロクロナデがみられ、外面は降灰により灰色を呈する。6は内・外面にロクロナデがみられ体部下部片と思われる。8・9は壺類の小片で、8は口縁部である。内・外面にロクロナデがみられ、長頸壺の口縁部片である。9は体部片で内面に同心円状の当て具痕、外面にカキ目がみられる。10～16、18は甕類の小片資料である。10～12は口縁部片で、内・外面にロクロナデがみられる。10には口唇頸部に波状文がみられる。13～16は内面に同心円状の当て具痕がみられ、外面にロクロナデ及び平行状の敲き痕がみられる。13～15は内外面が褐灰色を呈し、破断面がにぶい赤褐色を呈する。また、内面の当て具痕が細く、径が若干小さい。18は双耳壺の体部小片と思われ、突帯がみられる。上記の須恵器の帰属時期は、小片の為明確な時期を捉えることができなかった。

珠洲焼（第12図、図版4）

7は鉢口縁部片で内外面にロクロナデがみられ、口唇部は平坦に調整されている。17は甕体部片である。内・外面は灰色を呈し、外面に打圧痕、内面に押圧痕がみられる。

磁器（第12図、図版4）

19は小型椀の底部片である。外面に染付がみられる。帰属時期は近世と考えられる。

第4章　まとめ

今回の調査は泉古墳群9号墳を主体とした調査である。

検出した遺構は、円墳1基、土坑1基、溝3条である。

9号墳は周溝の内径から長径 15.2mの円墳で、構築時期は、大正年間の出土遺物・古墳の形状から古墳時代後期と考えられる。

なお、9号墳に隣接する8号墳は墳丘が確認されず、周溝と推定された落ち込みが現代の撹乱だったことから欠番とした。

遺物は、表土からの出土が大半で、主体部等から古墳に関連する遺物は出土しなかった。

出土遺物は須恵器が大半を占める。泉古墳群の範囲に包含される遺跡として過去に須恵器と土師器が採集された古代の遺跡領毛A遺跡と領毛B遺跡が所在する。泉9号墳は領毛A遺跡と隣接しており、むしろ当地の古代の様相を示す遺物と考えられる。

第２表　遺物観察表

番号	遺構名	層位	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	調整 外面	内面	文様	胎土	焼成	色調 外面	内面	残存量		備考
1	9号墳 SX03	上層	須恵器	甕	－	(5.7)	－	平行状タタキ	同心円状当て具痕		砂粒　少	良	褐灰	灰	体部	小片	
2	8・9号墳 南東部	表土	須恵器	有台付坏	－	(1.1)	(10.2)	ロクロナデ	ロクロナデ		砂粒　多	良	灰白	灰黄	底部	小片	
3	8・9号墳 北東部	表土	須恵器	瓶類？	－	(1.7)	8.4	ロクロナデ 底面クシ状工具による斜行線	ロクロナデ		砂粒　少	良	灰	灰	底部	1/12	
4	9号墳 南端部	表土	須恵器	瓶類	－	(3.2)	－	ロクロナデ カキ目	ロクロナデ 同心円状当て具痕		砂粒　少	良	灰	灰	体部	小片	外面　灰釉
5	9号墳 林道部	表土	須恵器	瓶類	－	(3.5)	－	ロクロナデ	ロクロナデ		砂粒　少 長石　少	良	灰	灰	体部	小片	外面　灰釉
6	9号墳 北東部	表土	須恵器	瓶類	－	(5.0)	－	ロクロナデ	ロクロナデ		砂粒　少	良	灰	灰	体部	小片	
7	8・9号墳 墳丘南部	表土	珠洲	鉢	－	(5.2)	－	ロクロナデ	ロクロナデ		砂粒　多	良	灰	灰	口縁	小片	
8	8・9号墳 T1北	表土	須恵器	壺	－	(5.9)	－	ロクロナデ	ロクロナデ		砂粒　多 礫　少	良	褐灰	褐灰	口縁	小片	外面　灰釉 内面　灰釉 試掘出土
9	8・9号墳 墳丘南部	表土	須恵器	壺	－	(4.7)	－	カキ目	同心円状当て具痕		砂粒　少	良	灰白	灰	体部	小片	外面　灰釉
10	8・9号墳 林道部	表土	須恵器	壺	(33.8)	(4.7)	－	ロクロナデ 波状文	ロクロナデ	波状紋	砂粒　多	良	灰	灰	口縁	小片	
11	8・9号墳 南東部	表土	須恵器	甕	19.2	(2.6)	－	ロクロナデ	ロクロナデ		砂粒　少	良	灰	灰	口縁	小片	
12	8・9号墳 南部	表土	須恵器	甕	－	(2.2)	－	ロクロナデ	ロクロナデ		砂粒　少	良	灰	灰	口縁	小片	
13	9号墳 南部	表土	須恵器	甕	－	(2.4)	－	ロクロナデ 平行状タタキ	ロクロナデ 同心円状当て具痕		砂粒　少	良	褐灰	褐灰	体部	小片	断面にぶい赤褐色
14	9号墳 南東部	表土	須恵器	甕	－	(4.1)	－	ロクロナデ 平行状タタキ カキメ	ロクロナデ 同心円状当て具痕		砂粒　少	良	褐灰	褐灰	体部	小片	断面にぶい赤褐色
15	9号墳 北東部	表土	須恵器	甕	－	(4.5)	－	平行状タタキ カキメ	同心円状当て具痕		砂粒　少	良	褐灰	褐灰	体部	小片	断面にぶい赤褐色
16	8・9号墳 北東部	表土	須恵器	甕	－	(5.1)	－	カキ目 平行タタキ	同心円状当て具痕		砂粒　多	良	灰黄	灰白	体部	小片	
17	8・9号墳 北東部	表土	珠洲	甕	－	(9.1)	－	打圧痕	押圧痕		砂粒　多	良	灰	灰	体部	少片	
18	8・9号墳 T3	表土	須恵器	双耳壺	－	(4.4)	－	ロクロナデ	ロクロナデ	突帯	砂粒　多	良	灰	褐灰	体部	小片	試掘出土
19	9号墳	表土	磁器	小型壺	－	(2.3)	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	素地-白	良			底部	小片	染付

引用・参考文献

氷見市 1999 『氷見市史』 9 資料編 7 自然環境

氷見市 2000 『氷見市史』 6 資料編 4 民俗、神社・寺院

氷見市 2002 『氷見市史』 7 資料編 5 考古

氷見市教育委員会 2002 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告書（丘陵地区）Ⅱ』 氷見市埋蔵文化財調査報告第 35 冊

氷見市教育委員会 2003 『新保南遺跡 中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書』 氷見市埋蔵文化財調査報告第 37 冊

氷見市教育委員会 2003 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告書（丘陵地区）Ⅲ』 氷見市埋蔵文化財調査報告第 39 冊

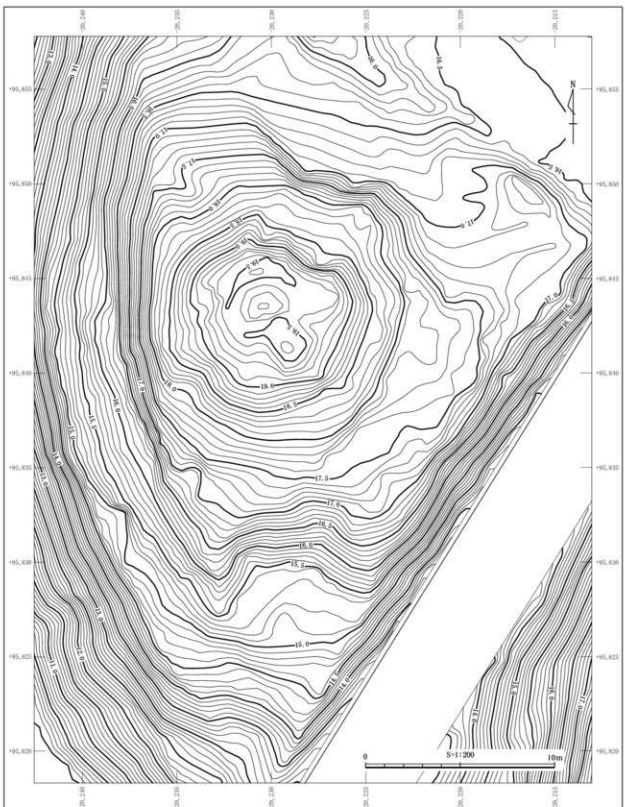
氷見市教育委員会 2004 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告書（丘陵地区）Ⅳ』 氷見市埋蔵文化財調査報告第 40 冊

氷見市教育委員会 2005 『氷見市埋蔵文化財分布調査報告書（丘陵地区）Ⅴ』 氷見市埋蔵文化財調査報告第 43 冊

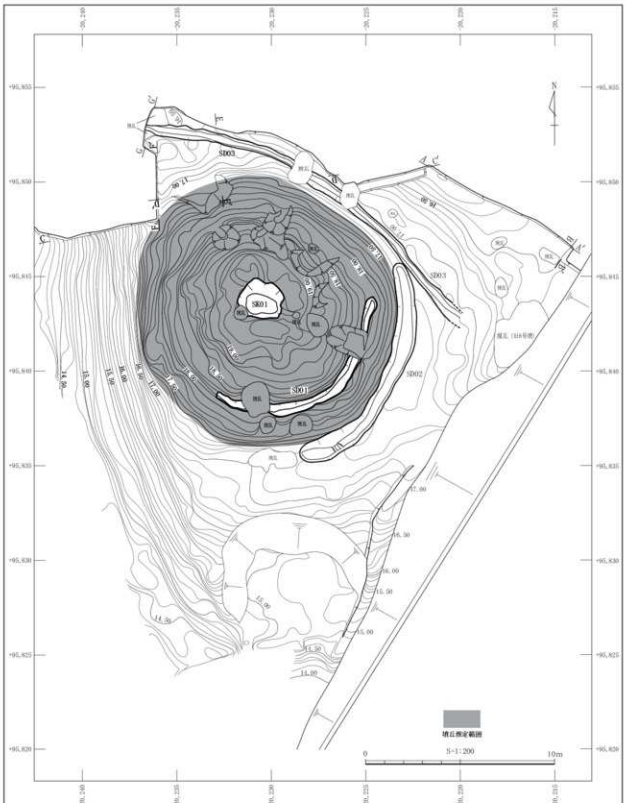
氷見市教育委員会 2008 『氷見市遺跡地図［第三版］【改訂版】』 氷見市埋蔵文化財調査報告第 51 冊

氷見市教育委員会 2019 『氷見市内遺跡発掘調査概報Ⅶ 平成 29・30 年度試掘調査の概要』 氷見市埋蔵文化財調査報告第 70 冊

氷見市教育委員会 2020 『氷見市内遺跡発掘調査概報Ⅷ 園地内急傾斜地崩壊対策工事に伴う園カンデ窯跡試掘調査ほか 付 森寺城跡追加測量調査の成果』 氷見市埋蔵文化財調査報告第 71 冊

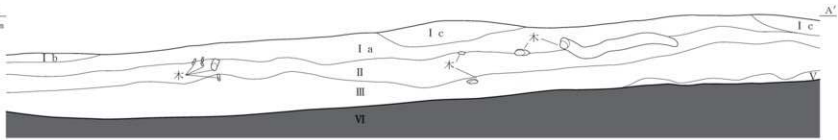


第５図　９号墳全体図（現況）（S＝1/200）

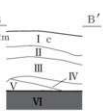


第６図　９号墳全体図（完掘）（S＝1/125）

調査区北東壁土層断面



調査区東壁土層断面



調査区北東壁・東壁土層断面

Ⅰa	10YR2/2	黒褐色腐植土　表土
Ⅰb	10YR2/3	黒褐色土　1～3cm泥岩小塊多量　表土
Ⅰc	10YR3/3	暗褐色土　φ1cm泥岩小塊少量　表土
Ⅱ	10YR4/3	にぶい黄褐色土　　φ1mm黄褐色粒多量　遺物包含層
Ⅲ	10YR2/2	黒褐色土　木根多量　遺物包含層
Ⅳ	10YR4/1	褐灰色粘質土　φ1mm黄褐色粒少量　間層
Ⅴ	10YR4/4	褐色粘質土　φ1mm黄褐色粒少量　漸移層
Ⅵ	10YR4/6	褐色粘土　地山

調査区北壁土層断面

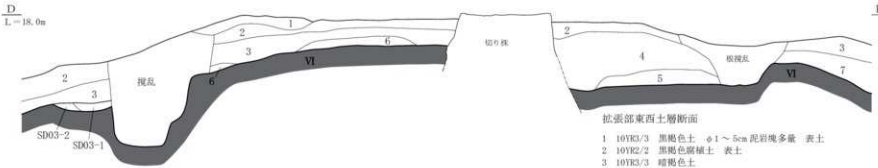
調査区北壁土層断面

1	10YR2/2	黒褐色腐植土　表土
2	10YR2/3	黒褐色土　φ1～3cm 泥岩少塊多量　表土
3	10YR3/3	暗褐色シルト　φ1cm 泥岩少塊少量　表土
4	10YR4/3	にぶい黄褐色土
5	10YR2/2	黒褐色土
6	10YR3/4	暗褐色土　φ1～20cm 泥岩塊多量　地山崩落土
Ⅵ	10YR7/4	にぶい黄橙色砂質土　φ5mm 泥岩粒少量 乃至　10YR7/4　にぶい黄橙色泥岩　地山

SD03

1	10YR3/4	暗褐色土　φ5mm 泥岩粒少量

拡張部東西土層断面

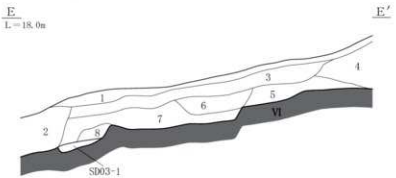


拡張部東西土層断面

1　10YR3/3　黒褐色土　φ1～5cm 泥岩塊多量　表土
2　10YR2/2　黒褐色腐植土　表土
3　10YR3/3　暗褐色土
4　10YR3/4　暗褐色砂質土　φ1～10cm 泥岩塊多量　地山崩落土
5　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土　φ1～3cm 泥岩塊少量
6　10YR6/3　にぶい黄橙色粘質土
Ⅵ　10YR6/4　にぶい黄橙色粘質土
　　乃至　にぶい黄橙色泥岩　地山

SD03
1　10YR3/4　暗褐色粘質土
2　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土　φ5mm 泥岩粒少量

拡張部南北土層断面

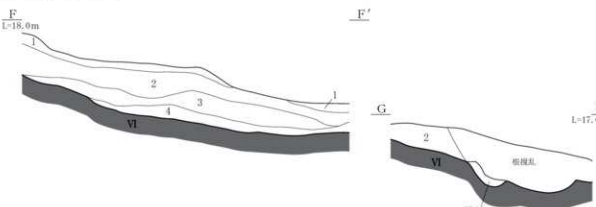


拡張部南北土層断面

1　10YR2/1　黒色腐植土　表土
2　10YR3/4　暗褐色土　根撹乱
3　10YR2/3　黒褐色土
4　10YR3/4　暗褐色砂質土　φ1～10cm 泥岩塊多量　地山崩落土
5　10YR4/2　灰黄褐色粘質土　φ5mm 泥岩粒少量　盛土？
6　10YR2/1　黒色土　木根多量
7　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土
8　10YR6/4　にぶい黄橙色砂質土　φ1cm 泥岩塊少量
Ⅵ　10YR7/4　にぶい黄橙色泥岩　地山

SD03
1　10YR3/4　暗褐色砂質土　φ5mm 泥岩粒少量

拡張部北西壁土層断面

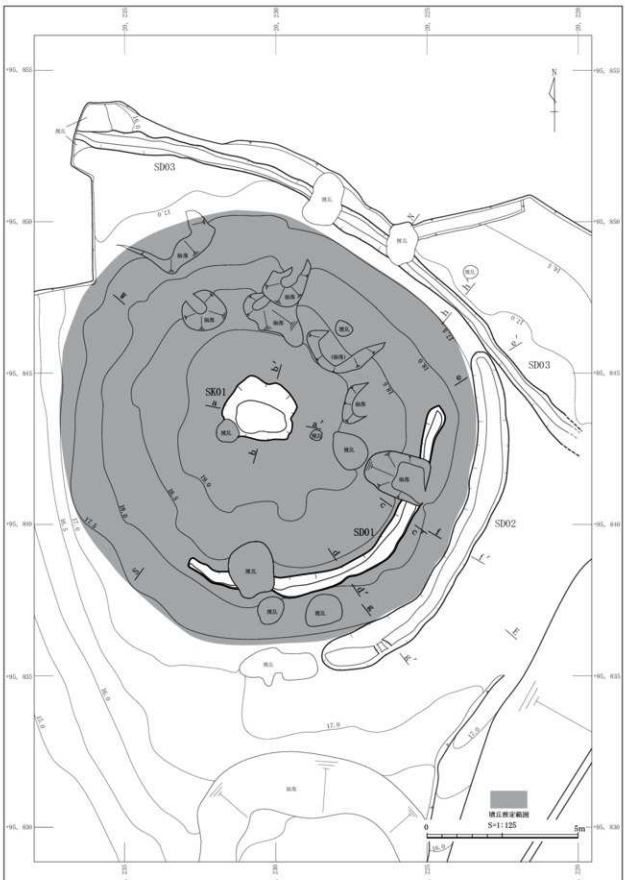


拡張部北西壁土層断面

1　10YR2/2　黒褐色腐植土
2　10YR3/4　暗褐色土　φ1 mm泥岩粒少量
3　10YR2/2　黒褐色土
4　10YR5/4　にぶい黄褐色砂質土
Ⅵ　10YR7/4　にぶい黄橙色砂質土　φ3～5cm
　　泥岩少塊少量　地山

SD03
1　10YR5/4　にぶい黄褐色土　φ5 mm泥岩粒少量

0　S=1:40　2m



第９図　遺構実測図３　９号墳完掘　(S=1/125)

９号墳　東西土層断面

９号墳　南北土層断面

９号墳　東西・南北土層断面

Ⅰa	10YR2/3	黒褐色腐植土　表土
Ⅱ	10YR3/4	暗褐色土
Ⅲ	10YR2/2	黒褐色土
1	10YR4/3	にぶい黄褐色土　φ1～5cm泥岩塊多量　流出土
2	10YR3/4	暗褐色土　φ3～5mm10YR7/2にぶい黄橙色粒少量　流出土
3	10YR3/4	暗褐色土　φ5～9mm10YR7/2にぶい黄橙色粒少量　流出土
4	10YR2/2	黒褐色粘質土　締まりなく脆い　流出土
5	10YR5/3	にぶい黄褐色粘質土　φ1cm泥岩小塊少量　盛土？
Ⅵ	10YR7/2	にぶい黄橙色砂質土＋10YR7/4　にぶい黄橙色泥岩　地山

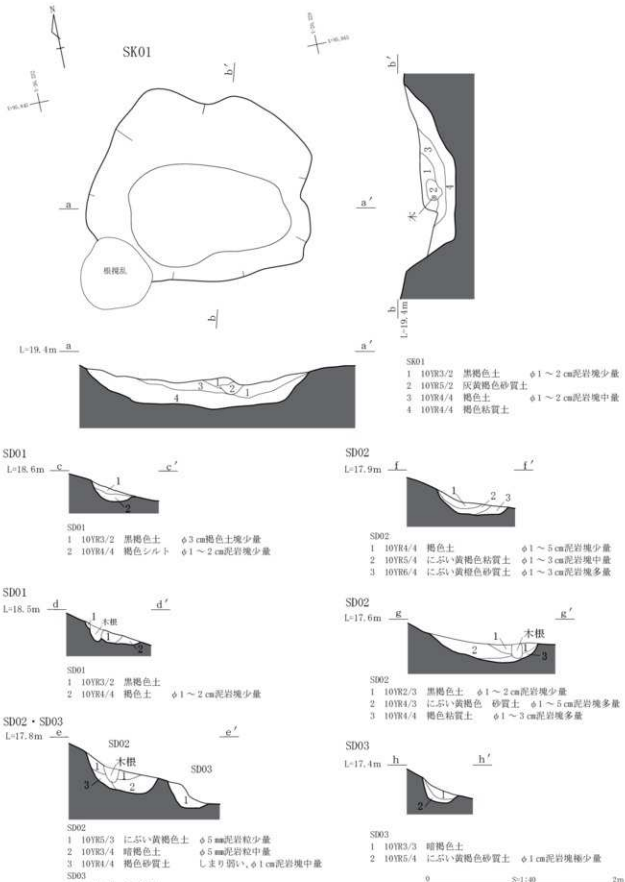
SD01

1	10YR2/2	黒褐色土　φ5mm泥岩粒少量

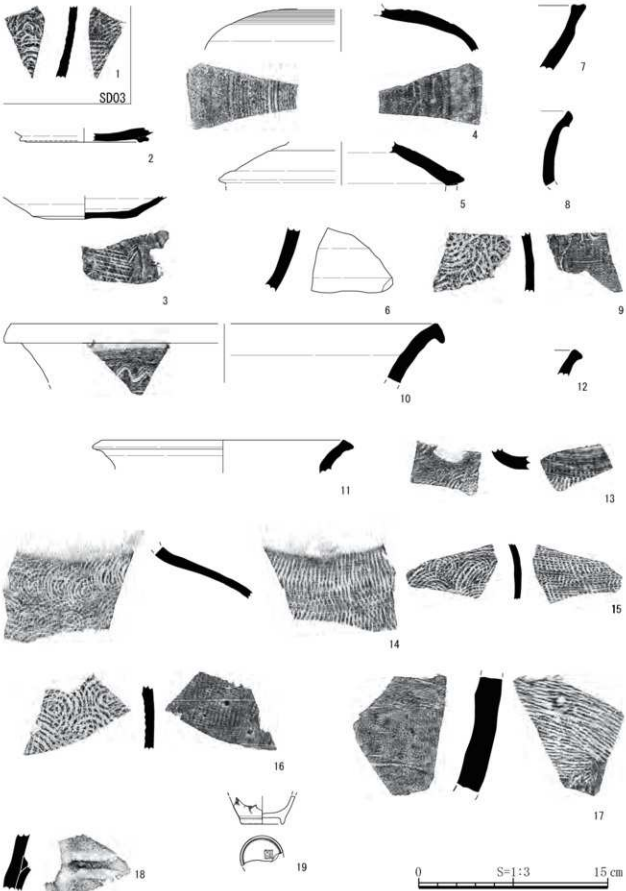
SD02

1	10YR2/2	黒褐色土　φ1cm泥岩塊多量

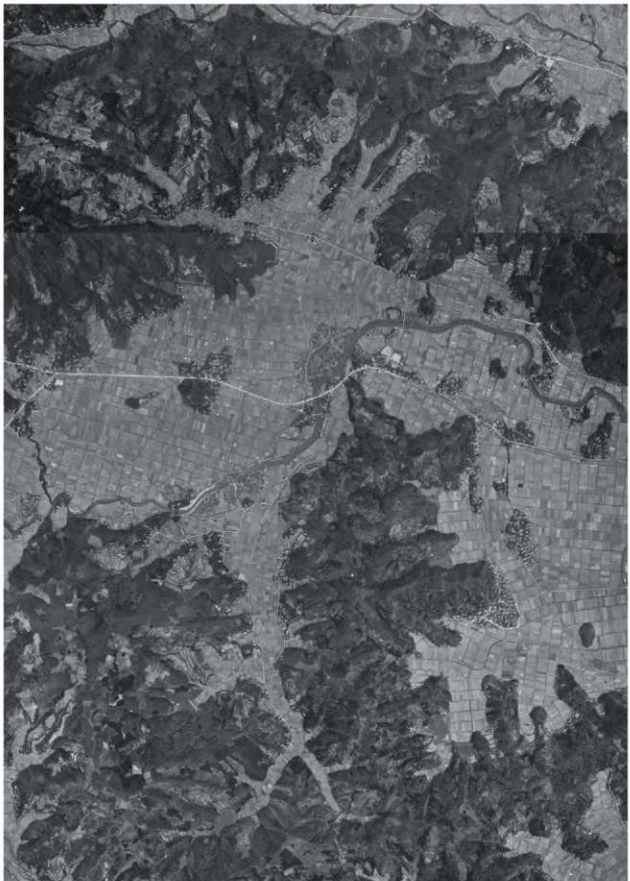
0　S=1:80　4m



第１１図　遺構実測図５ SK01・SD01・SD02・SD03 (S=1/40)



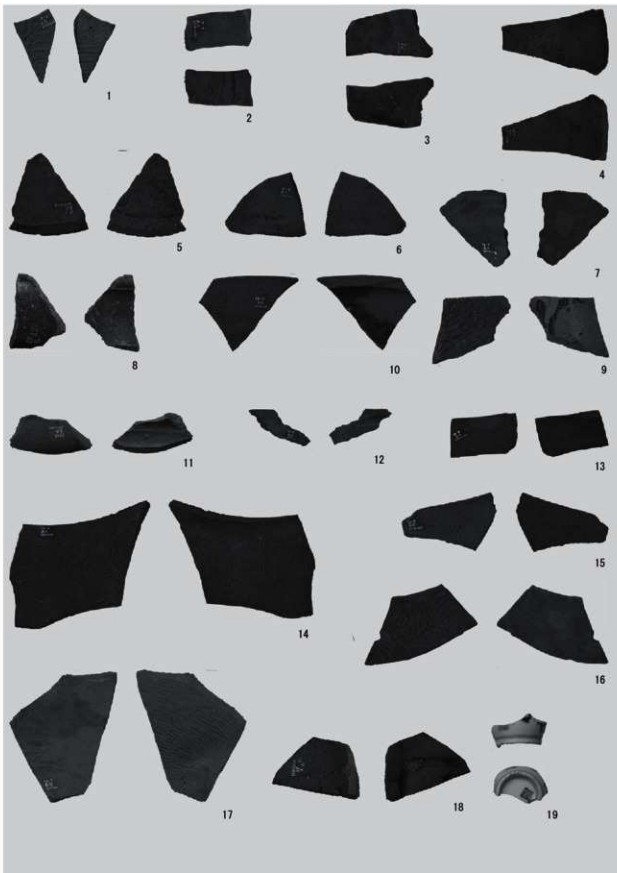
第１２図　遺物実測図　(S=1/3)



図版 1　遺跡周辺空中写真（昭和 38 年）　国土地理院
この写真は、国土地理院撮影の空中写真を複製したものである。

図版２　1.9号墳近景（南から）
2.9号墳東西土層断面東側（北から）3.9号墳東西土層断面西側（南東から）
4.9号墳南北土層断面南側（西から）5.9号墳南北土層断面北側（東から）

図版３　1. SK01 土層断面（北東から）　2. SK01 全景（東から）
3. SD01 土層断面（南西から）　4. SD02 土層断面（南から）
5. SD03 土層断面（東から）　6. SX02（8 号墳）検出（北から）
7. SX02（8 号墳）土層断面（南から）　8. 墳丘部作業風景



図版４　遺物写真

報 告 書 抄 録

ふりがな	いずみ９ごうふん
書　名	泉９号墳
副 書 名	一般国道415号（谷屋大野バイパス）道路改築事業に伴う泉古墳群発掘調査報告
巻　次	
シリーズ名	氷見市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第72冊
編 著 者 名	廣瀬　直樹・蝦名　純
編 集 機 関	氷見市教育委員会
所 在 地	〒935-0016　富山県氷見市本町４番９号　氷見市立博物館　TEL0766（74）8231
発 行 年 月 日	2020年12月18日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
いずみこふんぐん 泉古墳群	とやまけん 富山県 ひみし 氷見市 いずみ 泉	16205	042	36° 51′ 38″	136° 56′ 34″	本調査 20190917～ 20200107	本調査 635㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
泉９号墳	古墳	古代 古墳	円墳・主体部・周溝	土師器 須恵器 珠洲焼 陶磁器	９号墳で主体部、周溝を検出。

要約

９号墳では、主体部・周溝が検出された。主体部からの出土遺物はみられないが、大正年間の出土遺物から、古墳時代後期の円墳と考えられる。なお、９号墳に隣接する８号墳は、墳丘が確認されず、周溝と推定された落ち込みが現代の撹乱だったことから欠番とした。

出土遺物は、古代の遺物が主体となり、当地の古代の様相を示す遺物と考えられる。

令和２年 12 月 11 日印刷
令和２年 12 月 18 日発行

氷見市埋蔵文化財調査報告第 72 冊

泉９号墳

一般国道 415 号（谷屋大野バイパス）道路改築工事に伴う
泉古墳群発掘調査報告

編集・発行　氷見市教育委員会
〒 935-0016
富山県氷見市本町４番９号
氷見市立博物館
☎ 0766（74）8231
印　　刷　能登印刷株式会社